

### 3. 西保の出稼ぎについて

橋 本 雄 太

1. はじめに
2. 戦後出稼ぎの背景と概要
3. 西保の出稼ぎとその諸類型
4. 考察
5. おわりに

#### 1. はじめに

出稼ぎとは一般的には、一定期間生活の本拠地を離れ、他の場所で収入を得るため労働を行うことを指し、通常、季節労働を意味するが通年的なものもある。『石川県大百科事典』（北国出版社 1975）によれば、出稼ぎとは「旧来、自給自足を旨としていた農林漁業従事者が産業構造の変化や生活水準の向上により、現金収入の不足を補う必要に迫られて行っている異常な生活形態」とある。西保地区でフィールドワークをする前までは、出稼ぎとは生活するために「必要に迫られた」ものであり、出稼ぎが伴った生活とは「異常な生活形態」だと私自身も考えていた。日々を生きることで精一杯な生活、おぼろげながらもそのようなイメージを抱いていた。

しかし、実際に西保地区で多くの出稼ぎに関する話を聞くうちに、奇妙な違和感を覚えるようになった。「出稼ぎ先で稼いだ一部を競馬に投資した」とか、「京都で観光してから帰ってきた」といった話は、それまで自分が出稼ぎに対して抱いていたイメージを覆すのに十分なインパクトを持っていた。「あの頃はいい時代だった」という語り方を何度も耳にし、狐につままれたような気分になんた。西保の出稼ぎとは果たして「異常な生活形態」だったのだろうか。疑問を抱かずにはいられなかつた。

本章では以上で述べた疑問から、西保地区の出稼ぎ、特に戦後の出稼ぎに焦点を当て、現金獲得手段の一形態としての出稼ぎを記述すると同時に、現代の就業形態への変遷過程の一部として出稼ぎがいかに位置づけられるのかを考察したい。

#### 2. 戦後出稼ぎの背景と概要

西保地区での出稼ぎの具体的記述に入る前に、戦後の出稼ぎ状況について概観しておきたい。とい

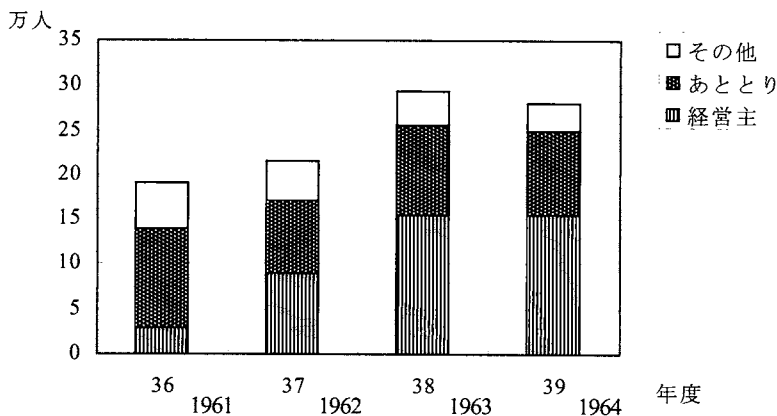
うのも、西保地区の出稼ぎも全国的な傾向、もっと範囲を絞れば北陸地方の出稼ぎ形態と基本的には一致するからである。

## 2-1. 全国的傾向

まず、全国的な出稼ぎの動態について述べる。『厚生白書（昭和 37 年（1962 年）版）』では間接的にではあるが、戦後初めて出稼ぎについてふれられている。高度経済成長期の村落部から工業都市圏への労働力の流出は、農業労働力の高齢化、女性化をきたした。結果的に世帯主は他に働きに出て、残された家族が飯米確保、その他の農業を営む兼業農家が増加したのもこの時期の特色である。白書では農家の主婦が家事と農作業の二重負担から労働過重となることが多くなると指摘されている。

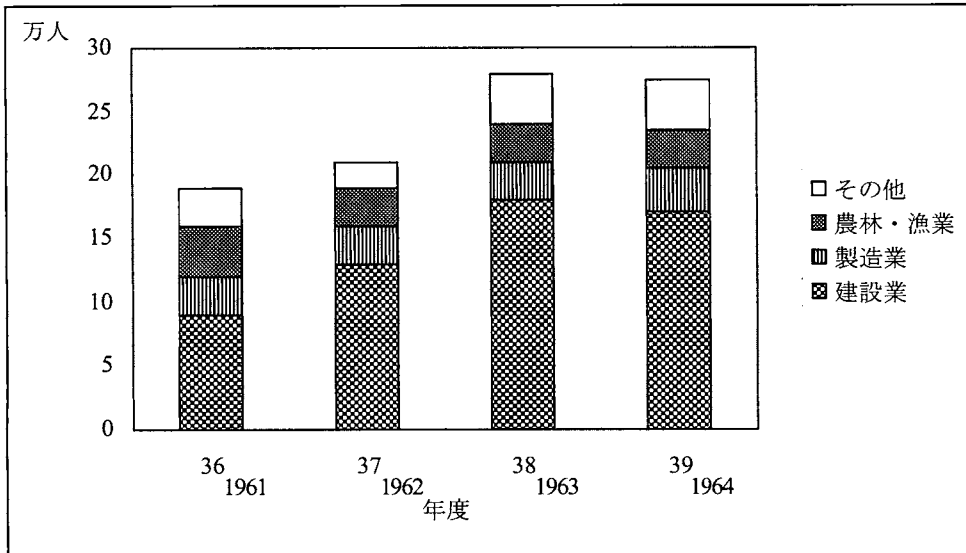
『厚生白書（昭和 39 年（1964 年）版）』で初めて出稼ぎについて直接的言及がなされる。ここで出稼ぎが「1 か月以上 6 か月未満の予定で家を離れて他に就業するもの」と定義される。出稼ぎ者の全国総数は、昭和 33（1958）年から 37（1962）年までの間は年間約 19 万人前後であったのが、38（1962）年に至って 29 万 8,000 人、39 年（1963）には 28 万 6,000 人と 30 万人近くにまで急増している。これら出稼ぎ者の内訳は、経営規模別では 5 反から 1 町の層が最も多く 34.4%、次いで 1 町から 1.5 町の層が 21.6%、1.5 町以上の層が 20%という順になっており、農家の上層に比較的多くなっていることが分かる。

表 1 出稼ぎ者数の推移（世帯上の地位別）



出所：厚生省『厚生白書（昭和 39 年（1964 年）版）』

表2 出稼ぎ者数の推移（出稼ぎ先の職業別）



出所：厚生省『厚生白書（昭和39年（1964年）版）』

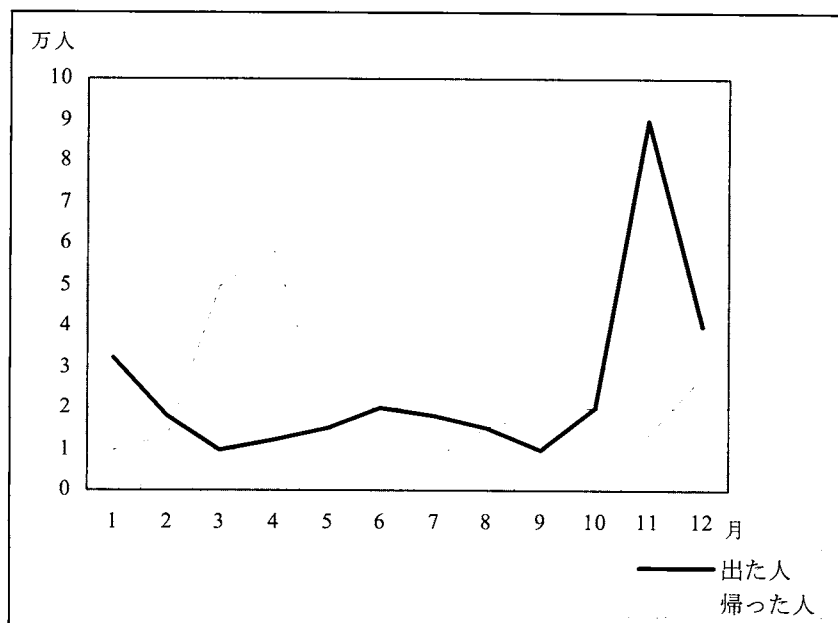
また、出稼ぎ者の世帯上の地位別では、表1のように経営主とあととりがそのほとんどを占めているのも特徴的だといえる。次男、三男などはすでに農村から流出してしまっているため、農閑期を利用した経営や、あととりの出稼ぎが出かせぎの中心となっている。年齢別の割合では20～34歳の41.3%を上回って35歳以上が47.8%とトップをしめ35年の25%に比して増加を示し、出稼ぎの高齢化が目立つ。

出稼ぎ者の出身地域別割合を見ると、兼業の機会の比較的少ない東北・北陸・九州がそれぞれ49.3%、14.2%、10.1%を示す。出稼ぎ増加の要因は、兼業機会を得ることのできない農家が、生活水準の向上による家計費支出の増加に対して農業所得の伸びが相対的に遅れているのを出稼ぎによってカバーするためである。経済の高度成長による建設業を中心とする労働力の需要増大がこれに対応している構図である。

出稼ぎ期間も長期化傾向を示し、従来の2、3か月程度が、5、6か月にわたるものに増加している。表3を見ても分かるように、離村者数のピークは11月で、帰村者数のピークはその翌年の3月から4月である。

農村世帯では父親の不在が恒常化し、母親もまた高齢化傾向にあった。女性化した農業の中心的担い手として昼間は家庭を留守にすることが多くなり、父母ともに不在がちな農家の増加が指摘されている。

表3 出稼ぎ者数の月別推移



出所：厚生省『厚生白書（昭和39年（1964年）版）』

『厚生白書（昭和51年（1976年）版）』では、出稼ぎそのものよりもそれがもたらす影響について指摘がなされている。出稼ぎの通年化・本業化傾向に伴い、留守をまもる農家の主婦の農作業の担い手としての重要性が一層増した。婦人の農林業就業者数は漸次減少してきたが、農林業就業者総数に占める婦人の比率は年々高まり、また、表4のように、農業就業人口に占める婦人の構成比をみても漸増傾向にある。

表4 農業就業人口の推移

	農業就業人口		基幹的農業従事者数	
	総 数	女	総 数	女
昭和35年 (1960)	1454 (100.0)	855 (58.8)	1175 (100.0)	624 (53.0)
40(1965)	1151 (100.0)	695 (60.4)	894 (100.0)	475 (53.1)
45(1970)	1025 (100.0)	628 (61.2)	705 (100.0)	383 (54.2)
48(1973)	849 (100.0)	530 (62.4)	625 (100.0)	352 (56.3)
49(1974)	802 (100.0)	502 (62.6)	591 (100.0)	334 (56.5)
50(1975)	791 (100.0)	493 (62.4)	489 (100.0)	259 (53.0)

出所：厚生省『厚生白書（昭和51年（1976年）版）』

ここで言及される農外就労の理由として「生活費として必要」が60%であり、「農業労働時間の減

少」が20%である。この農業労働時間の減少は農作業の機械化などによるものである。農村婦人の内、特に農家の主婦は農業労働、家事労働の二重の負担に加えて農外就労の負担を負う場合もあり、健康面における不安も白書では指摘されている。

## 2-2. 北陸地方の傾向

次に北陸地方の出稼ぎ状況について述べる。北陸地方は三大出稼ぎ地帯の一つである。出稼ぎ農家は昭和35（1960）年の約28000戸から40（1965）年には約60%増の約45400に急増した。しかし、その後逆に減少傾向に転じ、45（1970）年には約29600戸、さらに47（1972）年には約23400戸に減少している。出稼ぎ者数で見ると、昭和35（1960）年の42000人台から40（1965）年には66000人に達し、45（1970）年には出稼ぎ農家戸数と同様に減少、45000人台となる。北陸四県のうち新潟県が70%前後を占めてもっとも多く、それに次ぐ石川県が10%台である。北陸四県のうち、新潟県と石川県が出稼ぎの中心であるといえる。県内においても地域的偏在性が見られる。

石川県の場合、その出身地のほとんどが珠洲及び輪島市周辺の奥能登に集中しており、石川県全体の約60～70%をこの地域が占めている。それが中能登、口能登に至るにしたがって少なくなり、加賀地域ではまったく見られなくなる。

表5 出稼ぎ先別出稼ぎ者構成（昭和42～46年平均）

区 分		北 陸	新潟県	石川県
出稼ぎ者総数 (%)		100.0	100.0	100.0
大都市地域	計	68.5	71.0	77.4
	京 浜	37.0	47.8	4.7
	中 京	17.3	18.2	24.1
	京阪神	12.0	4.9	43.1
	その他	2.2	0.1	5.5
その他地域	計	31.5	29.0	22.6
	県 内	7.5	7.4	14.2
	その他	24.0	21.6	8.4

出所：大川健詞『出稼ぎの経済学』p.81

新潟にしても石川にしても、いずれも交通の便が悪い地帯で、かつ地場就職の機会が圧倒的に少ないこと、農業基盤の弱さ、沢棚田が多く零細農家が大部分を占める、といった諸要因がこの地域に出稼ぎを必然化させていた。出稼ぎの収入の総収入に占める割合をみると、北陸全体では5割以上が25%前後であり、新潟と福井の二県が他県に比較して出稼ぎへの依存度が低い。加えて、表5の出稼ぎ先をみると、北陸全体では京浜（37%）を中心に大都市に68.5%が集中。大都市圏への集中度は石川が特に強く、77.4%である。ただし、新潟と石川では出稼ぎ先が対照的で、新潟は京浜に50%・中京に20%弱が集中しているのに対し、石川は43%が京阪神・24%が中京地帯に集中している。新潟は関東労働市場に、石川は関西労働市場と結びついているといえる。

### 2-3. 石川県の傾向

石川県では農業経営規模が零細でまた地元雇用機会が少ない能登地方、特に能登北部地域から多くの人が加賀地区や京阪神など県外に出稼ぎしている。中でも建設業、繊維関係、食料品製造などに就労しているが、夫婦出稼ぎや就労期間の長期化、通年化の傾向が見られる。また、杜氏、左官などの伝統的出稼ぎにおいても雇用を巡る労働条件に関するトラブル、あるいは就労期間中の留守家族の問題など社会的な問題として注目されていた。このような問題に対処するため国営奥能登農用地開発事業などによる農業経営規模の拡大、工場再配置法などによる工業の導入など地域開発と合わせ、当面の対策として出稼ぎにかかわる各種援護対策が講じられていた。

表6より石川県の全体的な傾向として、県内よりも県外の割合が増加している、女性の割合が比較的多い、京阪神地域が多く中京地区も増加している、能登と穴水の職安管内で県全体の97%を占めている、などがある。渡辺（1987:115）によれば、昭和60年（1985年）で石川県の出稼ぎ者は6001名となっているが、昭和46年の数字を100とした場合の指数は45.3となる。全国の指数値が44.6であったので、これより石川県の数値はやや高く、出稼ぎ者の減少率は全国平均より低い。

表6 石川県における出稼ぎ労働者の推移

	昭和46年度		昭和50年度		昭和55年度		昭和60年度	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
県内外	4009	30.2	2078	24.1	1891	24.9	1325	22.1
県内	9252	69.8	6561	75.9	5701	75.1	4676	77.9
男女別	7827	59.0	5825	67.4	5706	75.2	4747	79.1
男	5434	41.0	2814	32.6	1886	24.8	1254	20.9
女								
県外就労地別								
京 浜	258	2.8	167	2.5	180	3.2	100	2.1
中 京	939	10.1	723	11.0	1154	20.2	1029	22.0
北 陸	555	6.0	478	7.3	477	8.4	426	9.1
京阪神	3113	33.6	2334	35.6	1579	27.7	1054	22.6
その他	4387	47.4	2859	43.6	2311	40.5	2067	44.2
安定所別								
能 登	7810	58.9	5323	61.6	4850	63.9	4181	69.7
穴 水	5046	38.1	3151	36.5	2573	33.9	1652	27.5
七 尾	246	1.9	43	0.5	98	1.3	91	1.5
羽 咋	114	0.9	122	1.4	71	0.9	20	0.3
その他	45	0.3	0	0	0	0	57	1.0
県計	13261	(100)	8639	(65.1)	7592	(57.3)	6001	(45.3)

出所：渡辺栄『出稼ぎの総合的研究』p.116

### 3. 西保の出稼ぎとその諸類型

以上の節で戦後出稼ぎの形態を全国的傾向、北陸、石川県の統計データを基に論じてきたが、本節ではいよいよ西保の出稼ぎの詳細な記述に移る。先にも述べたとおり、西保の戦後出稼ぎはその職種や期間といった形態において全国的、あるいは北陸のそれとほぼ一致する。しかしながら、出稼ぎへと向かわせる要因や詳細な実態については、白書やその他統計資料等で言及されるような一枚岩的な

ものではなく、異なる点も多い。以下では夏期の本調査・冬の補充調査から得られた情報を基に、出稼ぎを四つの項目に分けてそれぞれ記述する。

### 3-1. 戦後の職業形態の変遷と出稼ぎ

まず、西保で出稼ぎが戦後の高度成長期に現金収入獲得手段として生じた背景について述べる。西保公民館発行の『西保村から輪島市へ あれからはやくも 50 年』(2004)によれば、農閑期の出稼ぎが始まったのは昭和 37 年(1962 年)である。これは全国的な傾向とも一致する。この時期から出稼ぎが本格化することとなる。これには道路交通網の整備が一役買っている。輪島から路線バスが小池口まで開通したのが昭和 32(1957)年、大沢まで開通したのが昭和 36(1961)年、上大沢が昭和 50(1975)年という具合にバス路線が整備された。このバスを利用して輪島まで出て、そこから県内各地あるいは県外へと出稼ぎに出たのである。この路線が整備される前は輪島へ出るのも徒歩、あるいは船で直接行くほかなかった。M 氏(60 代女性)は、「当時は車なんてものもなかったから、肉や服を買うのに輪島まで歩いて 3 時間かけて出たよ」と語っていた。

道路が整備される以前は大沢でも醤油とタバコは買えたそうだが、それ以外のものは輪島で手に入る他なかった。そのためにはある程度の現金が必要であり、それも一定の収入として毎月稼ぐ必要がある。戦前から戦後にかけての現金獲得手段はいかなるものであったのだろうか。西保で出稼ぎがどのような文脈で現金獲得手段として採用されていったのか。

まず、戦前から戦後にかけては桄木地の製作、漁業(イワシの刺し網漁)、炭焼きが主要な現金獲得手段であった。桄木地とは輪島塗に使う木地のことで、西保の中でも大沢がその製作の中心地であった。当時、大沢には桄木地製作の拠点がいくつかあり、各拠点がそれぞれ専属の職人を抱えていた。桄木地製作の日当は 350 円で、「戦後に出稼ぎが始まって 1 月から 3 月の間は桄木地を作った」という人(70 代男性)もいた。桄木地は道路も整備されていなかったもので、船で輪島まで運ばれた。イワシの刺し網漁は日当 3000 円で、炭焼きが一釜で 50 俵とれた。一俵で 10 円程度であったので、一釜で 500 円ということになる。

戦後、出稼ぎへと現金収入獲得の手段がシフトしていったのには、出稼ぎに高収入が見込まれることが一因にある。県内外問わず、出稼ぎの方が地元にいるよりも多額の収入が得られるからである。一例でいうと、1960 年代、大沢で一日働いて 2000 円であったが、出稼ぎでは職種にもよるがピーク時には一日で 15000 円を得ることができた。出稼ぎが本格的に始まると同時に、それまでの主要な現金獲得手段であった桄木地製作・刺し網漁・炭焼きがそれぞれ速度は異なるものの、衰退に向かい始める。桄木地製品は安価なプラスチック製の桄の登場により、需要が減ることとなった。ただし、この三つの中で一番息が長かったのは実はこの桄木地製作である。イワシの刺し網漁は不振となり、昭和 35(1960)年に休漁となる。炭焼きは石油、ガス、電気などのインフラ整備に伴いその必要性が薄れ、炭が売れなくなり衰退した。現在の現金獲得手段は、サラリー、年金、漁、農作物の販売などである。農作物は、輪島の朝市で販売する。ジャガイモ、サツマイモ、ワカメ、岩のりなどを荷どら<sup>1)</sup>

という籠に入れて売りに行く。漁は船を出す方、つまり燃料費に経費を取られ、採算を取るのはなかなか難しいとのことである。

道路の整備と共に、自家用車が登場し始めるのは1960年代前半である。海産物やその他農作物などを輪島に運ぶのに、船よりも安価で早い自動車が重宝された。この自家用車の購入資金に充てるのに出稼ぎが必要とされることとなる。また、この頃はテレビや電気製品が一般世帯に普及し始めた時期でもあり、これら家財や耐久消費財を購入するのにより多くの現金が必要とされ、多くの人が男女問わず出稼ぎに出ることとなった。

### 3-2. 出稼ぎのスタイル

西保の出稼ぎは基本的に農閑期を利用したものである。ただし、西保でも出稼ぎの通年化傾向が見られ、一年のほとんどを出稼ぎ先で過ごす、というパターンもなくはない。西保、特に大沢で出稼ぎが頻繁に行われていた頃の通年サイクルを示すと以下の表7のようになる。この表は、大沢を中心とした聞き取りを中心に筆者が作成したものである。

表7 大沢における年間労働サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
主 な 職種	田畑・漁業		漁業メイン			出稼ぎ (ただし、10月に一度戻る。)				失業保険の受領 桤木地製作		

これはあくまで一例である。6月から8月にかけては漁業がメインとあるが、この頃から出稼ぎに出る人もいる。中には6月から12月まで出稼ぎに出て、冬期は家にいるという人もいた。「大沢は海と山があることが（現金収入を生む上で）メリットだね」と語る人（70代男性）もいた。また、大沢以外の集落も基本的に農繁期を避けて出稼ぎに出ていた。西二又では10月下旬から3月まで神戸の造り酒屋に出ていた人（70代男性）もいる。上山は大沢や上大沢と異なり、漁業がその生業に含まれないため、年中出稼ぎに出ているというパターンが比較的多数である。一家で田畑を世話する人がいれば、主に家長が出稼ぎに出ていた。S氏（70代男性）は「年中戻らない人もいました。そうでなければ農繁期だけ戻ってきていたがね」と語った。

出稼ぎの斡旋は、大きく分けて二つある。ひとつは職安や農協が仕事を紹介する場合であり、統計資料に反映されているのも職安を通じたパターンである場合が多い。この方法はフォーマルなパターンといえる。職安は仕事を紹介だけでなく、宿泊先の手配もカバーしていたようであり、「職安の手配で出稼ぎ先の農家に泊まってね。帰りは見物旅行もしてきたわ」という人（70代女性）もいた。もうひとつは出稼ぎに出た人が帰ってきて仕事を紹介、現場の親方が徒弟を通じて仕事を紹介といったインフォーマルなパターンである。たとえば、東京オリンピックが行われた昭和39年（1964年）頃、いろいろな紡績会社が西保に人材募集に回ってきていた。ある人（50代男性）は「前金をやるから来てくれと言っていた。輪島にいた仲介業者が菓子折りをもって回ってきていたよ」と語っていた。集める側もどれだけ必死だったか伝わってくるエピソードである。また、似たような仕事を何人かの



親方の徒弟が持ってきて、賃金の高い方を選ぶというような方法もあった。何度か出稼ぎに出て、仕事先の親方と顔なじみになってくると、直接電話で仕事の紹介をされることもあったようだ。

出稼ぎに出れば、冬場には失業保険を受け取り、生活の足しにする。制度上は6ヵ月間働けば3ヵ月分の失業保険が得られる。この失業保険の受領に関する書類は親方が書くことになっている。しかし、実際は出稼ぎに出ても農繁期の稲の刈り入れや祭りのために10月に一ヶ月程集落に戻ってくる。また、実際に働きに出るのは8月からというパターンがほとんどである。これらを考慮すると、実際は6ヵ月間働いていないことになる。実際に働いているのは約4ヵ月である。これでは失業保険の基準を満たしていないことになる。しかしながら、紙の上では7月から12月の6ヵ月間の契約ということで処理され、親方もそのように書類を書いた。こうして、3ヵ月分の失業保険を受領し、冬の生活費の一部に充てた。

出稼ぎ先は、大阪、京都、奈良、神戸、和歌山などの京阪神方面に加えて名古屋、岐阜などの中京方面、主として東京の関東方面に大別される。そして西保の出稼ぎで重要なのは県内の出稼ぎである。金沢をはじめ、加賀、小松にも出ていた。輪島にも日雇いの形で働きに出ることがあり、N氏（70代女性）は「冬には輪島へ土方の仕事に行ったものよ。スコップもって下水道へ入ったりね」と語った。上山の場合は他の集落と比較して出稼ぎ先が県内にはほぼ限定されている。職種はほとんどが建設業で型枠作りが主であった。他には、一ヶ月ほど稲刈りやみかんの収穫に出たりもした。東京オリンピックの時には、東京へ道路掃除の出稼ぎもあった。土建業の中では、ダム建設やホテル、体育館建設に関わった人もいる。西保ならではの出稼ぎの一つとして、輪島へ漆塗りの出稼ぎに出たというパターンもある。輪島漆器の椀木地の製作から漆塗りの部分まで、場所は違えど西保の人が関わっているのは大変興味深い。出稼ぎ先や本人の性別によって職種や期間は変わってくるのだが、それは次節で詳しく述べる。

出稼ぎ先では飯場に寝泊りしていた。飯場での食事作りの人も出稼ぎとして来ていた。飯場で寝泊りするのに料金はかからず、組ごとに場所が割り振られ、そこで寝ていた。長期にわたって出稼ぎに出ることで望郷の念に駆られることもあったのかどうか聞いたところ、M氏（70代男性）は「いんや、組で出稼ぎに出ていたんで、それはなかったね」と語った。西保の場合、出稼ぎには個人というよりも、組で出ている場合がほとんどで、その規模はまちまちである。3人の場合もあれば、10～15人に及ぶ場合もある。出稼ぎ先にはやはり地方から出てきた人が多く、「青森や秋田の人が多かったよ」（70代男性）とのことである。

賃金は先にも述べたように、出稼ぎに出ることでそれまでの倍以上に増加した。1950年代後半は集落で一日働いて250～300円であったが、1960年代に入り仕事（特に建設業）の増加により一日1000円得られるようになった。西保で出稼ぎが本格化し始める1960年代後半は一日で3000円、高度経済成長が上り坂になると職種にもよるが、一日で5000円、10000円、12000円の時もあった。ピーク時は15000円得られたこともあった。

また、出稼ぎとは出稼ぎに出る当事者だけの問題ではない。いわゆる、留守家族の存在を忘れては

ならない。西保での留守家族は主としてお年寄りや勤め人であった。子どもは主として一家の祖父母が面倒を見たようである。Y氏（80代男性）は「子どもに土産を買って帰ることもあったよ」と語られたが、留守家族の一員である子どもとの関係は完全に分断されたものではなかったことがうかがえる。また、祖父母のみならず、集落ぐるみで子どもの面倒を見たことは想像に難くない。M氏（70代男性）は「あの頃は集落に人がたくさんおったから、子どもはみんなに育てられたようなもの」と語る。

### 3-3. 出稼ぎ先、性別、職種ごとの類型

ここでは、先に述べてきた西保の出稼ぎの概況を踏まえた上で、出稼ぎ先や男女、従事する職種で何らかの傾向が見られるのかどうか考察する。夏の本調査、冬の補充調査（2006年12月2日実施）で出稼ぎに関する話を直接聞くことができた人のうち、比較する要素として従事した職業、出稼ぎ先、期間が明確な人は全部で20人であった。その内訳は男性12人、女性8人である。もちろん、定量的観点から見れば数として不十分であるかもしれないが、定性的なデータとしての情報量は十分であると筆者は判断したので、この20人分のデータをもとに議論を組み立てていく所存である。また、実際に出稼ぎに出てはいないものの、西保の出稼ぎの傾向や実態についての語りも十分あるので、これらも議論の中に取り込んでいく。なお、ここでの議論は4節の考察の材料となることを付け加えておく。

まず、主な出稼ぎ先の類型を見てみたい。以下の表8は出稼ぎ先別に類別したものである。20人のうち、出稼ぎ先が県内だけにとどまる人もいれば、県内にも県外にも出たことがある人もいる。よって、実数の合計は20にはならないことをここで断っておく。

表8 出稼ぎ先別出稼ぎ者数

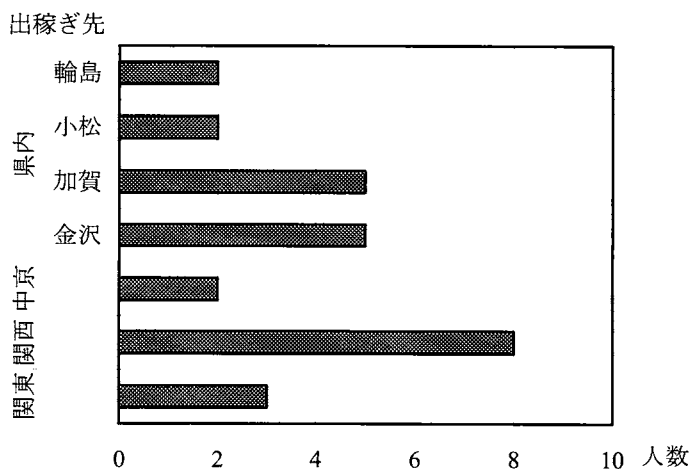


表8から読み取れるのは、まず県内へ出るパターンが県外へ出るそれと同じくらいあるということ

である。加賀や小松への稲刈り、金沢での型枠作りなどがその主な職種である。また、県外では関西圏への出稼ぎが比較的多いことがいえる。関西圏の主な内訳は、和歌山、京都、奈良、大阪、神戸である。職種は土建業や稲刈りなどの農業補助が主であるが、和歌山ではみかんの収穫、神戸では造り酒屋での杜氏など、特定の土地にはその土地ならではの仕事に就く傾向も強いことが分かる。関東では東京、横浜、栃木に土建業の出稼ぎに出た。その中には栃木県の有名な川俣ダム<sup>2)</sup>の建設に従事した人もいる。また、東京オリンピックのときに道路掃除の出稼ぎにでた M 氏（70 代男性）は、「東京見物も兼ねたようなものだったね。東京のこと知らんのに声かけられて、道を教えたこともあったね」と語った。

次に、男性と女性で出稼ぎ先がどのように異なるのか検討したい。20 人のうち男女の内訳は、男性 12 人、女性 8 人である。次の表 9 は年代の分布と出稼ぎ先の類型を示したものである。

表 9 年代の分布と男女による出稼ぎ先の違い

	50 代	60 代	70 代	80 代	合計	県内	県外	県内外	合計
男性	1	2	7	2	12	5	4	3	12
女性	0	2	5	1	8	4	1	3	8
合計	1	4	12	3	20	9	5	6	20

まず男女による差異の前に、年代分布を見ると 70 代と 80 代が 4 分の 3 を占める。もちろん、西保の全世帯を対象として出稼ぎに関する定量的調査をしたわけではないので一概に言い切ることはできないが、現在 70 代の男女が比較的に出稼ぎによく出ている傾向が見られる。70 代の男女が 20 代後半の頃に出稼ぎが本格化し始めるので、数の上でのつじつまは合う。逆に、70 代の前後にある 80 代と 60 代は少ない。これには出稼ぎ本格化以前と以降がそれぞれ対応する。60 代で数が減っているのは、職種形態の変化によるものと考えられる。いわゆるサラリーマンとしての職を選択し、西保を離れ始めるのもこの世代からである。

男女での出稼ぎ先の違いに視点を移すと、男女共に県内に出ている人が比較的多いこと見て取れる。県外に出ている女性は県内外も合わせると 4 人であるが、これは稲刈りやみかんの収穫といった農業補助労働である。県内に出稼ぎに出た女性は農業補助労働だけでなく、輪島で冬に土建業に従事していた人（70 代女性）もいる。「冬に集落から 2～3 人の集団でトラックに乗って輪島まで行ったものよ」と語っていた。県内外に出たことのあるアクティブな人は男女共に 3 人ずついる。

次に、職種による類型化を試みる。以下の表 10 は出稼ぎ先と男女の類型に職種を掛け合わせて類型化したものである。

表 10 出稼ぎ先・男女・職種による類型

	県内		県外		県内外		合計
	男	女	男	女	男	女	
土建業	5	1	4	0	1	1	12
農業補助	0	3	0	1	1	2	7
その他	0	0	0	0	1	0	1
合計	5	4	4	1	3	3	20

まず目に付くのは、土建業が半数以上を占め、そのほとんどは男性であることである。土建業の中でも特に型枠作りがその主要職種として挙げられる。他にはダムやホテル、公共施設などの建設が含まれている。N氏（70代男性）はホテルの加賀屋や体育館の建設に従事したという。また、稲刈りやみかんの収穫といった農業補助労働は女性に集中しているのが分かる。その他には、杜氏や工場労働が含まれるが、西保では出稼ぎで土建業と農業補助労働以外の職種をほとんど聞かなかった。その中でもある男性（70代）は、子どもが生まれた昭和32（1957）年頃から出稼ぎに出始め、10月下旬～3月に杜氏として神戸の酒屋へ、昭和54（1979）年より輪島の箸工場に4～5人のグループで行くようになったとのことである。

最後に、類型化において集落ごとの違いは見られない。強いて挙げるなら、上山の出稼ぎ先は県内にはほぼ限られている。その原因は明確ではないが、主な出稼ぎ先は県内でも金沢、加賀、小松、鶴来、美川である。

### 3.4. 出稼ぎ衰退の要因

出稼ぎそのものはつい最近の6～7年前まで行われていた。出稼ぎが始まった頃の関西圏や関東圏の大都市での土建というより、県内の金沢で型枠作りに従事するパターンである。しかし、現在の西保で出稼ぎに出ている人はいない。出稼ぎが現金獲得手段として衰退していったのには、大別して三つの要因があると考えられる。

一つは各種産業の機械化によるものである。土建業でも農業にしても機械化が進むことで人手がいなくなったことが一因である。例えば、稲刈りにしてもコンバインの導入により、人手を必要としなくなった。土建業に関しても生コンの混合や掘削が機械化され、人が直接に生コンを混ぜたり、掘削をする機会が減った。M氏（70代男性）によると、道路建設をする場合に山を削る必要があるが、「昔は人が山の斜面に並んで鍬で削っていたがね。今は機械でやってしまうからね。人がいらんのよ」と語った。また、S氏（70代女性）は「農業に機械が入ってくる前は大阪の農家に稲刈りの手伝いによくいったよ。それを8年続けたよ」と語った。S氏をはじめ、農業補助労働に出た経験のある人のほとんどが、「機械化」をキーワードとして挙げた。多くの人手を必要とする田植えや稲刈りが機械化されることで、農業補助労働の需要が減少したことが強調されるのである。

出稼ぎが衰退した要因の二つ目は、出稼ぎ者の高齢化である。出稼ぎに出た経験のある人は70代に集中し、且つ現在も出稼ぎに出ている人はいない。多くの人が60歳頃まで出稼ぎに出ていたと語った。逆算すれば、1990年代に西保の出稼ぎは終息に向かったといえる。出稼ぎは土建業でも農業補助労働にしても、基礎体力がものを言う、身体が資本の一労働形態である。先に述べた産業の機械化に加え、高齢化に伴うことで出稼ぎに出ることは困難になったといえる。

三つ目には職種形態の変化が挙げられる。西保には現在その規模は別にして、農業、漁業、林業がある。これらが生み出す現金収入は決して多いものではなく、農業も輪島の朝市で作物を売ることがあるが、基本的に飯米農業である。漁業も、船を出すための燃料代と漁獲高が釣り合わない、時にマ

イナスになることもあるという。林業<sup>3)</sup>も人件費がかかる上に、外国産の材木の流入に押され、現金収入獲得の主要な手段にはなりえていない。N氏(70代男性)は「結局、林業も割に合わないからね」と語った。3-1でも述べたように、現在の西保における現金収入の主な獲得手段は、年金、漁、農作物の販売、サラリーである。いわゆるホワイトカラー職を選択する世代が現在の60代前半から徐々に増え始め、それに伴って生活の拠点を西保から輪島や金沢に移す人も増えた。不定期に県内外問わずあちこちへ出る出稼ぎを現金収入獲得の第一手段としてするよりも、毎月まとまった収入が得られる安定的な職業をメインとして選択した結果である。

最後に付け加えておくと、これら三つの要因はそれぞれが独立したものではない。互いに連関性を持ち、重なり合うことで出稼ぎは現金収入獲得手段として採用されなくなったといえる。

## 4. 考察

本節ではこれまで述べてきたことを基礎として、二つの点に絞って西保の出稼ぎを考察する。まずは、2節では白書を中心とした統計資料を基に戦後の出稼ぎがどのような実態であったか全国、北陸地方、石川県の三つに分けて論じたが、これら資料で示されていることと、今回の西保での出稼ぎに関する調査で分かったことを比較・検討する。次に、これまでの議論を受けて西保での出稼ぎとはいかに位置付けられるのかを考察する。

### 4-1. 統計資料との比較

ここでは白書など2節で提示した統計資料との照らし合わせ・検討を行う。2節の冒頭でも述べたように、戦後に出稼ぎが恒常化した文脈は全国・北陸の傾向と西保のそれは符合する。出稼ぎの文脈は、石川県は地場就職の機会が圧倒的に少なく、農業基盤がぜい弱であり、零細農家が多数を占め、戦後の高度成長による建設業を中心とする労働力の需要増大がこれに対応して農家の人を都市部が吸収する構図である。西保の場合もこの構図と重なる。ただ、細部において異なる点はいくつかある。

まず、根本的な差異として、出稼ぎに出る理由である。『厚生白書(昭和51年(1976年)版)』によれば、農外就労の理由として60%が「生活費として必要」を挙げている。西保も生活水準の向上による家計費支出を補うための出稼ぎという側面ももちろんあるが、M氏(60代女性)は、「出稼ぎに出なくても生活することは十分できたよ」と語る。食うや食わずのために出稼ぎに出ていたわけではないのだ。また、離村者のピークは『厚生白書(昭和39年(1964年)版)』では11月となっているが、西保の場合は11月よりも早い9月に出る人が比較的多い。

出稼ぎ先については、石川県の出稼ぎ者は関西労働市場と結びついていると述べたが、西保も県外への出稼ぎであれば関西圏へ出るパターンがほとんどである。加えて、西保の場合は県内の金沢や加賀、小松に出稼ぎに出る人が比較的多い。これは、石川県の出稼ぎ者の出身地のほとんどが珠洲及び輪島市周辺の奥能登に集中していることとも関連する。出稼ぎ者は中能登、口能登に至るにしたがっ

で少なくなり、加賀地域では見られなくなる。つまり、加賀地域の人は出稼ぎに出る必要がなかった、加賀には現金収入を得られる仕事があったということである。よって、県内の出稼ぎ者を集めることとなったといえる。

出稼ぎ先で従事する職種については、西保では土建業でも特に型枠作りが主である。白書など統計資料で指摘されている繊維関係や食料品製造の工場労働に従事したというケースは、筆者が知りうる限りほとんどない。

#### 4.2. 西保における出稼ぎの意味

西保における出稼ぎの意味とは何だったのだろうか。戦後日本の経済成長を支えた出稼ぎであるが、筆者が目を通した文献のほとんどは出稼ぎに出ることで生じた社会的問題のみに議論が終始していた。しかし、西保では社会的問題よりも出稼ぎが集落にもたらした経済的・社会的効果がより強調されていた。西保における出稼ぎを筆者なりに位置づけるなら、第一にプラスアルファを求める側面が強かったことが挙げられる。先にも述べたように、もちろん出稼ぎに出る人全員がプラスアルファだけを求めていたわけではないだろう。中には留守家族や出稼ぎ先の生活費を稼ぐためであり、それが充足されればプラスアルファを求める出稼ぎへと意味合いを変化させていったパターンも十分考えられる。とはいえ、hand to mouth の側面ばかりが強ければ、「あの頃はよかった」というセリフが現在聞かれるとは到底思えない。出稼ぎで得た現金を帰りに競馬に充ててほとんどをすってしまった、というエピソードもいかに解釈すべきだろうか。高度経済成長期という時代に、戦後直後では考えられなかったような収入が入ってくる高揚感、収入に比例して生活環境が次々に刷新されていく様子が「あの頃はよかった」と口にする人たちと話していると伝わってくるのである。

二つ目は、出稼ぎに集団で出ることと留守家族が集落ぐるみで子どもを育てることによる、集落としての一体感の再生産がなされていたことである。留守家族の子育ての問題や主婦の二重負担が白書では取り上げられているが、西保ではこれを家族あるいは集落ぐるみでカバーすることで問題をある程度解消していった。よって、西保では職種や期間こそ異なるものの、男女関係なく出稼ぎに出ることができたといえる。また、個人でなく組で出稼ぎに出たことも大きい。3 節で述べたように、飯場での生活の仕方も組、つまり出身集落が単位となっていた。また、9 月に出稼ぎに出ても、10 月には稲刈りと祭りのために集落に一月ほど戻ってきていた。このように、出稼ぎ当事者と留守家族、それぞれの関係において集落としての一体感が出稼ぎ先あるいは集落で再生産されていたと考えられる。

西保で聞いた「あの頃はよかった」という言葉には、おそらく集落としての一体感が現在よりもより強固なものだったというニュアンスも含まれている。これは、集落の過疎化という形で可視化している。壮年団や祭りに関しても現在の規模で今後も続けていくことは難しいと言われていたが、そのような語りの裏返し「あの頃はよかった」なのかもしれない。

## 5. おわりに

本章で述べてきたことは、あくまで筆者が切り取ったひとつの形であることに変わりはない。西保で耳にした「あの頃はいい時代だったよ」の衝撃的一言から、戦後の出稼ぎへの関心が筆者の中で高まっていった。その一言に引きつけられて、出稼ぎ状況下の西保を想像してきたわけであるが、「いい時代」であるとする要素を見つけようとしていた側面は否めない。ゆえに、「いい時代」とはそぐわないような要素を意識的、あるいは無意識的に排除してきた点も否めない。実際、出稼ぎに出ることによる留守家族の育児の負担、出稼ぎ先での人間関係上のトラブルなど、問題があった可能性はゼロではないと今は感じる。出稼ぎがもたらしたマイナスの側面として、現在集落に住んでいない世代が出稼ぎという親がいない生活スタイルを幼い頃より目の当たりにしていたことは、現在の過疎化につながる重要な要素のように思える。留守家族の一員として育てられた世代が、集落を離れるという選択肢を取り、それが結果的に集落の過疎化を招いていると言えるかもしれない。

筆者は1980年代前半の生まれであり、戦後の状況を直接見聞きしているわけではない。80年代の生まれの私にとって、自分が直接知らない時代、土地のことを現在の「語り」を基に構築していく作業は、自身の無知を痛感すると同時に、固定観念を破壊する作業でもあった。1節で述べたように、西保に行く前までは私も出稼ぎは社会的問題が取り沙汰されるような、「異常な生活形態」だと考えていた。しかし、実際にフィールドで耳にする出稼ぎに関する「語り」は、そのほとんどが「あの頃はいい時代だった」に結びついていった。それらは、筆者の中にあつた出稼ぎに対する固定観念を揺るがすものであつた。フィールドワーク中もそうであつたが、特に本章を執筆しながら、どのような生活形態が「正常」だといえるのかという問題は常に頭の隅にあつた。何が生活形態を「異常」であると決定するのかは時代によって異なるという理解で跳ね除けてしまうのは、いささか性急なようにも感じる。むしろ、乳幼児を家に残して遊びに出してしまう両親もいるような現代の生活形態が果たして正常であるといえるのか、首を傾げてしまわざるをえない。

本章の執筆は単なるノスタルジーに帰することなく、生活のあり方が戦後いかに変化し現在へと至っているのか記述することで、結果的に現代社会への理解の一助となった。出稼ぎという、自身の生き方に関わる微妙な内容を快く話して下さった西保の方々には心より感謝したい。

## 注

- <sup>1)</sup> フラでできた籠。携帯性に優れ、畑で作物を入れたり、買い物籠として使ったりする。昔は両足に履いて雪を均すのにも使われた。
- <sup>2)</sup> 栃木県塩谷郡栗山村大字川俣字鬼怒泊にあるダム。堤頂長131mに対し、堤高が117mもあり、アーチ型ダムとしては日本一。既設のコンクリートダムとしても日本で3番目になる。建設着手は1957年、竣工は1966年。
- <sup>3)</sup> 西保の林業は戦後の経済成長に伴って盛んになった。空襲で家が焼かれたために材木の需要が高まったことにその一因がある。また、国が植林事業に補助金を出したことも大きい。また、特徴的な形態として移動製材がある。

移動製材とは原材を山中で持ち運びやすく製材・加工した後にふもとまで降ろす、製材手法である。西保では40～50年前に行われていた。2007年に閉校となる西保中学校も移動製材の成果の一つである。